

2023 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	教授	中山 孝男
最終学歴	学 位	専門分野
一橋大学大学院経済学研究科理論経済学及び統計学 専攻博士後期課程単位修得満期退学	経済学修士	経済学

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

・「何事も基礎が重要」との基本方針のもと、演習も含め、すべての担当科目で最も基礎のレベルからの教育を実践する。

【目標】

・「経済学」では、昨年のテキスト選択（をはじめいくつか）の失敗を反省し、今年度は、テキストをほぼ自作のものとして、教えたい内容をわかりやすく作文し、それを毎回 Teams を使って配信する方式にした（つまり特定のテキストを使用しない）。また、毎回の授業の最後には、（これもまた自作し、初回の授業で履修者全員に配布した）「経済学 確認問題集」を利用して、授業内容を確認する。

・「学びの基礎Ⅰ・Ⅱ」では、昨年までと同じく、教える範囲をあまり広げないことを心掛けたい。漢字の読み編では、「日経新聞」の社説に登場する漢字の読みを（できれば）100%に近づけたい。また、数量編では、なんと言っても「%」をはじめとする「割合」に関する種々の分野で正確に問題が解けるようにすることが目標である。小学校で学んではいるものの、その後の「数学」等の授業ではほとんど扱われてこなかった内容であるので、忘れてしまっていて十分には理解できていないところを中心に基礎から教えていく。そのためにも、テキストは一部改訂してある。

・「現代経済学」は、今年度で3年目になる。過去2回教えてきて、学生の反応がほぼわかってきたので、それをもとに「経済学」に比べて一段階上級の経済理論的な考え方をする学問の入り口にまで案内できることを目標としたい。

・「国際関係論」は、（今年度開講されるかどうか不明であるが）過去2年度連続して使用したテキストを再度使用して、さらに内容の濃い講義を進めていきたい。今まで行なってきた授業の準備等から科目担当者として身につけた知識及び考え方をしっかりと受講生に伝えたい。

【方針】

・上に挙げた担当科目のそれぞれで、科目内容について基礎的なレベルから丁寧に説明されているテキストを選び（ないし自分で作成したものを利用して）、授業では（予習してきたはずの）テキスト内容を確認するためにまずPPTで説明し、その上でテキストより少し上のレベルのことを教え、次回までにきちんと復習することを促す。

【計画（方法）】

・今年度は、基本的に対面で授業を行なう（ただ受講者数が多すぎるクラスもあるが）ので、受講生の反応をよく見ながら、「わかる授業」（できれば「楽しく、かつ役に立ちそうだなと思える授業」）を実現していきたい。

【担当科目】

(前期)

学びの基礎Ⅰ、基礎演習Ⅰ、経済学

(後期)

学びの基礎Ⅱ、基礎演習Ⅱ、現代経済学、国際関係論

○教育方法の実践

- ・前期の「経済学」では、昨年度テキスト選択に失敗した反省から、自分が教えたい内容のテキストを自作してオンラインで配布する方式を取り、それ自体は成功したと判断している。特に熱心な学生が最終回に配布し忘れたファイルを私に送付してくれと要求するまでになったことは非常にうれしく感じた。また、自作のテキストに合わせて自作の「経済学＜確認問題集＞」を、授業内容の確認と復習に使用したことは学修効果を上げる点で非常に良かったと自己評価している。
- ・後期の「国際関係論」では、受講生が留学生の4人のみであったが、過去数年間の授業経験を活かして、私のできうる最高の講義が実践できたと考えている。
- ・後期の「現代経済学」では、やはり、過去数年間の授業実践を活かした授業ができたと自己評価している。
- ・「学びの基礎Ⅰ」「学びの基礎Ⅱ」では、最低限の内容を教えることに成功したと考える。

○作成した教科書・教材

「学びの基礎Ⅰ 2023年度版」「学びの基礎Ⅱ 2023年度版」「経済学＜確認問題集＞2023年度版」

○自己評価

- ・「国際関係論」は今年度で閉講であろうが、最終年度として今までの集大成の授業ができたとして自己評価する。「学びの基礎Ⅰ」「学びの基礎Ⅱ」は、次年度は内容のレベルと範囲をもう少し拡充した方が良いのではないかと考える。「経済学」は、もう1年間、今年度と同様に行っていきたい。

Ⅱ 研究活動

○研究課題

- ・D. リカードウの（遺稿）「絶対価値と交換価値」の解明

○目標・計画

【目標】

- ・昨年度途中から上記テーマに関する研究を継続している。言うまでもなく、本テーマに関しては、経済学史学会、経済理論学会などにおいて数えきれないほどの先行研究があるので、少なくともその代表的な文献を渉猟していき、自分なりに納得がいく結論を導いていくほかに方法はない。できる限り明確な自説を固め、本学紀要に投稿することを目標とする。なお、先頃、今年度の経済理論学会全国大会において、昨年度に続いて、上記テーマで学会報告を予定している方からコメンテーターの依頼があった。ぜひ引き受けて私自身の研究の糧としたい。

【計画】

- ・とにかく、上記テーマおよびそれに関連する周辺テーマ（A. スミス、等の価値論史）の文献収集とそれらを精読するのみである。

○2016年4月から2024年3月の研究実績（特許等含む）

(著書)

- ・なし

(学術論文)

- ・中山孝男「リカードウ新機械論に関する一小論——機械導入後を中心として——」『東邦学誌』第50巻第2号、2021年12月

(学会発表)

- ・なし

(特許)

- ・なし

(その他)

- ・経済理論学会第70回全国大会(2022.10.東京経済大学)において、『『絶対価値と交換価値』とリカードウの不変の価値尺度』(石井穰報告)に対するコメンテーター役を果たした。
- ・経済理論学会第71回全国大会(2023.11.東北学院大学)において、『『絶対価値と交換価値』研究史—戦後日本のリカードウ研究との関連で—』(石井穰報告)に対するコメンテーター役を果たした。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

- ・なし

○所属学会

- ・経済理論学会
- ・経済学史学会
- ・マルサス学会
- ・政治経済学・経済史学会

○自己評価

・2年続けて、経済理論学会で同様なテーマの報告に対するコメンテーター役を果たすことになった。このテーマは、いわゆる未解決の課題でなかなか決定的な解を見いだすことが困難であり、私も少し手がけたが、やはり、資料が不足していることが主たる理由として自説を公表することは、今のところ断念せざるを得ない状態である。ただ、コメンテーター役とは言え、経済理論学会に対して若干でも貢献できたことは、ここに記しておきたい。

Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

・学内委員としては、自己点検・評価委員会、自己点検・評価実施部会、入試問題作成委員会、の各委員として、また学園理事(労務担当など)として学園全般の運営に責任をもってあたらなければならないと考えている。とくに、今年度から、衛生委員会の委員長にも就任したので、この面でも責任をもって業務を遂行していく。

【計画】

・授業担当コマ数が削減されているとはいえ、昨年度同様、受講生の関係で増担となっている。きちんと時間配分を考えて教育と研究の継続を心掛けていく。とくに、入試問題作成委員としては、決してミスが許されないので、最大限の注意を払っていく。

○学内委員等

- ・自己点検・評価委員会、自己点検評価実施部会、入試問題作成委員
- ・法人組織として、衛生委員会委員長など

○自己評価

- ・上記の委員会における委員としての仕事は、ほぼ問題なく果たせたと考える。また、学園理事（労務担当など）として学園全般の運営にも十分責任を果たせたと自己評価する。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

- ・本学での教育・研究活動の成果をできるかぎり地域社会に還元するように努力する。また、今年も、日本高等教育評価機構より大学認証評価委員に任命された。その仕事での社会貢献に努めたい。

【計画】

- ・東邦高校との高大連携授業や、他の高校からの出張講義要請などがあればできるかぎり応じて、貢献する。
- ・所属する経済理論学会の東海部会の会場校として学会活動の面でも積極的に協力する。

○学会活動等

- ・過去3年間ほどコロナ禍で活動が十分にできなかったが、経済理論学会の東海部会会場校として、今年度は研究会を2回開催できた。

○地域連携・社会貢献等

- ・東邦高校との高大連携授業担当者として、1・2年生相手に興味をもってもらえるテーマで授業ができたと考えている。
- ・4年連続で、日本高等教育評価機構の大学認証評価員として職責を果たした。

○自己評価

- ・上記の面で、社会貢献ができたとして自己評価する。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等）

- ・なし

VI 総括

- ・教育活動、研究活動、大学運営、社会貢献の4つの項目のうち、研究活動以外の3分野では、標準以上の成果を残していると自負している。研究活動に関しては、上述の通り、リカードウの遺稿「絶対価値と交換価値」に関する学会報告に対するコメンテーター役を2年続けて引き受けた関係で、その内容をある程度は理解できるようになったが、何しろ一次資料の極端な制限という問題があり、自説を論文として発表するまでには至っていない。このような事情から、残された研究生生活の最後のテーマを別のものにせざるを得ない。次年度は、同じD. リカードウの比較生産費説に関してできるだけ原典に即した解釈を追究していきたい。

以 上